

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Kinship Terms in the Kikaijima Dialect of the Amami Region: Focusing on Words for 'Father', 'Mother', 'Grandfather', and 'Grandmother'

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木部, 暢子, KIBE, Nobuko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000772

奄美喜界島方言の親族語彙

—お父さん・お母さん・お爺さん・お婆さん—

Kinship Terms in the Kikaijima Dialect of the Amami Region:

Focusing on Words for 'Father', 'Mother', 'Grandfather', and 'Grandmother'

木部 暢子 (KIBE Nobuko)

1. はじめに

このプロジェクトは、消滅の危機の度合いの高い方言を重点的に調査し、その記録と保存を行なうことを主な目的としている。2010年4月からこれまでに、沖縄県与那国島、宮古島、久米島、鹿児島県与論島、沖永良部島、喜界島、東京都八丈島で調査を行なってきた。ここでは、鹿児島県喜界島方言の親族語彙のうち「お父さん・お母さん・お爺さん・お婆さん」を表す語を取り上げ、喜界島方言の親族語彙のシステムについて考える。なお、親族語には親族名称 (reference term) と親族呼称 (address term) の2つがあるが、奄美・沖縄方言では一般に、両者を区別しない。喜界島方言でも区別がないので、以下では両者を合わせて親族語彙と呼び、「お父さん」を表す語のような表現を使う。

2. 「アンマー」は「お母さん」か「お婆さん」か

奄美の有名な島唄のひとつ「行きゅんにゃ加那」に次のような歌詞がある。

あんまとうじゅう <small>ながい</small>	お母さんとお父さん
長生きしんしょれい	長生きしてください
あんまとうじゅう	お母さんとお父さん
<small>くめい</small> 米とうてい <small>まめい</small> 豆とうてい	(私が働いて) 米を取って豆を取って
<small>みしゅ</small> 召上らしゅんど	食べさせて差し上げますから

ここに歌われているように、奄美では「お父さん」のことを「ジュー」, 「お母さん」のことを「アンマ」と言う。須山 (1979) — 明治35 (1902) 年生まれの長田須磨氏の記憶にある奄美大島大和浜方言の親族名称についてまとめたもの — によると、上層階級では「お父さん」を *zjuu* (ジュー), 「お母さん」を *?anma* (アンマ) と呼び、下層階級では「お父さん」を *?azja* (アジャ), 「お母さん」を *?ago* (アゴ) と呼んだという。親族呼称は、時代や地域、社会階層により使われる語に違いや制限がある。奄美では特に、階層による親族語の使い分けが厳しかった。島唄に歌われている「ジュー、アンマ」は、奄美大島大和浜では上層階級の人に限って使われることばだったようである。

大正から昭和初期にかけての喜界島方言に関しては、岩倉市郎著・柳田国男編（1941）の『喜界島方言集』により知ることができる。それには次のように書かれている。

アチャー 父。又家庭に依っては若い祖父をかく呼ぶことがある。

アンマー 母。家に依っては若い母をイナンマーと呼び、祖母をアンマーと呼ぶ。

「父」の「アチャー」は、先に見た奄美大島大和浜の下層階級の ?azja（アジャ）に、「アンマー」は上層階級の ?anma（アンマ）につながるものだが、『喜界島方言集』によると、家庭に依っては若い祖父、祖母を呼ぶときにも使われたという。じつは、2010年の喜界島方言調査でも「アチャー、アンマー」が「お父さん、お母さん」を表したり「お爺さん、お婆さん」を表したりするということがあった。ただ、「アチャー」はすでに古語になっている地域があり、そこでは「ヤッキー」がこれに替わっている。

親族語彙には、時代や社会階層により差があるとは言っても、同じ地域で同じ語が「お母さん」を表したり「お婆さん」を表したりするというのは、どういうことなのだろうか。これで問題が起きないのだろうか。また、なぜ、このようなことが起きるのか。こうした疑問をきっかけとして、喜界島方言の「お父さん・お母さん・お爺さん・お婆さん」を表す語のシステムとその変化についてまとめてみた。ここではそれを紹介する。

3. 喜界島方言の「お母さん・お婆さん」を表す語

最初に「お母さん・お婆さん」を表す語から見ることにしよう。2010年の調査では、基礎語彙と文法項目で「お母さん・お婆さん」にあたる語を調査した。文法項目の調査文は、次のとおりである。

お母さん：文法 26「かあさんは あした 東京へ むすこに 会いに いく。」

同 67「花子は かあさんに ごはんを たべさせて もらった。」

同 69「かあさんは 市場へ 買物に 行った。」

同 74「花子は 顔が かあさんに よく 似ている。」

お婆さん：文法 64「雨のふる日には ばあさんは 家で テレビばかり 見ている。」

同 65「お祝いの ときには ばあさんまで おどった。」

これに対する回答のうち、北部の^{おのつ}小野津、^{しとおけ}志戸桶、南部の^{かみかてつ}上嘉鉄、^{なかざと}中里、^{あらき}荒木の5地点の回答をまとめたのが、表1である（各地点の地理的な位置は末尾の地図を参照のこと）。

表1を見ると、北部の小野津と志戸桶では、全員が「お母さん」を「オッカ」系（オッカ・オッカ・オッカ）で回答し、「お婆さん」を「アンマ」系（アンマ・アンマー）で回答している（以下、「オッカ」系の語形を「オッカ」で、「アンマ」系の語形を「アンマ」で代表させる）。それに対し、南部の上嘉鉄、中里、荒木では、個人差や個人の中での揺れが大きい。たとえば、上嘉鉄では上嘉鉄(1)が小野津や志戸桶と同じ「お母さん／お婆さん＝オッ

表1 喜界島方言の「お母さん」と「お婆さん」を表す語

語・調査文 地域 (個人 ID)	「お母さん」				「お婆さん」	
	文法 26	文法 67	文法 69	文法 74	文法 64	文法 65
小野津 (1)	オッカ	オッカ	オッカ	オッカー	<u>アンマ</u>	<u>アンマー</u>
小野津 (2)	オッカ	オッカ	オッカ	オッカ	<u>アンマ</u>	<u>アンマー</u>
志戸桶 (1)	オッカ	オッカ	オッカ	オッカ	<u>アンマー</u>	<u>アンマー</u>
志戸桶 (2)	オッカ	オッカ	オッカ	オッカ	<u>アンマー</u>	<u>アンマー</u>
上嘉鉄 (1)	/	オッカ	オッカー	オッカ	<u>アンマー</u>	<u>アンマー</u>
上嘉鉄 (2)	<u>アンマー</u>	<u>アンマー</u>	<u>アンマー</u>	<u>アンマー</u>	アニー	アニー
中 里 (1)	<u>アンマー</u>	<u>アンマー</u>	オッカ	オッカ	アニー	アニー
中 里 (2)	オッカ	オッカ	オッカ	オッカ	<u>アンマ</u>	アニー
荒 木 (1)	オッカ	<u>アンマ</u>	<u>アンマ</u>	<u>アンマ</u>	<u>アンマ</u>	アニー
荒 木 (2)	<u>アンマー</u>	オッカ	オッカ	オッカ	<u>アンマ</u>	<u>アンマー</u>

(「アンマ」系の語をゴチックにし、下線を引いた。/は、該当する語が表現されなかったことを表す。なお、喉頭化を表す記号は省略した。)

カ/アンマー」という回答をしているのに対し、上嘉鉄 (2) は「アンマ」をもっぱら「お母さん」の意味で使い、「お婆さん」には「アニー」を使っている。『喜界島方言集』に書いてあったように、家庭によって「アンマ」が「お母さん」を表したり「お婆さん」を表したりするという状況が、2010年の調査でも上嘉鉄で確認された。

中里と荒木では、一個人の中で語形が揺れている。このうち中里では、中里 (1) が「お母さん／お婆さん＝アンマ～オッカ／アニー」という揺れ、中里 (2) が「お母さん／お婆さん＝オッカ／アンマ～アニー」という揺れであり、個人の中で「お母さん」と「お婆さん」が混用することはない。ただし、中里 (1) と中里 (2) が会話をした場合には、中里 (1) の「アンマ (お母さん)」と中里 (2) の「アンマ (お婆さん)」の間で混用が起きる可能性がある。

揺れがもっとも大きいのが荒木で、個人の中でも地域の中でも、「アンマ」がときに「お母さん」を、ときに「お婆さん」を表すといった状態である。これで困ることはないのかと尋ねたところ、「ない」という回答であった。日常生活では、目の前にいる人に呼びかけたり、話題の人物が誰であるか、分かった上で話をしたりするので、不都合は生じないのかもしれない。

4. 「お母さん・お婆さん」を表す語の歴史

では、なぜ「アンマ」が地域により、人により、あるいは一人の人の中でも、「お母さん」を表したり「お婆さん」を表したりするのか。

まず、「お母さん」を表す「アンマー」は、先に見たように、伝統的な奄美方言の語形で

ある。これに対し、「オッカ」は鹿児島方言から入ってきた新しい語形である。鹿児島本土では、古くは「お父さん」に「トト、トトサア」、「お母さん」に「カカ、カカサア、カカドン」が使われていたが、大正から昭和にかけて「お父さん」に「オッチャン、チャン」、「お母さん」に「オッカ」が使われるようになった（木部 2013）。この「オッカ」が喜界島に取り入れられたのである。先に挙げた須山（1979）には、大正期に新しく移入されたことばとして、「チャン、とーチャン、オトッチャン」「オッカ、かーちゃん、オッカサン」「アニサン、ニーサン、ニーちゃん、ニ」「ネーサン、ネーちゃん、ネ」「バツパン、オバサン」（表記は原文のママ）が挙げられている。一方、『喜界島方言集』には「オッカ」が掲載されていないから、喜界島に「オッカ」が入ったのは奄美大島よりもだいぶ遅れ、戦後になってからのようである。

次に、「お婆さん」を表す「アニー」は、『喜界島方言集』に「アネイー 祖母。または女の老人—老婆。」として出ている。『喜界島方言集』の「ネィ」は本土方言の「ネ」に対応する音を表すので、喜界島方言の「お婆さん」は「姉」に由来すると考えることができる。なぜ、「姉」に由来する語が「お婆さん」になったのかは別の機会に譲ることとして、ここでは「アニー（アネイー）」が古くから「お婆さん」を表す語として使用されてきたこと、したがって、「アンマ」が「お婆さん」を表すのは、新しい現象であることを確認しておこう。

以上の「お母さん」の歴史と「お婆さん」の歴史を合わせると、図1のようになる。

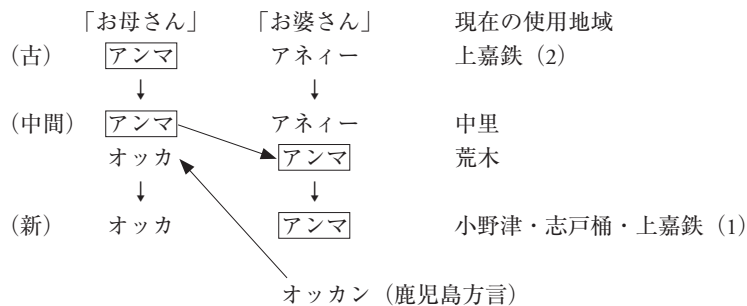


図1 喜界島方言の「お母さん・お婆さん」を表す語の変化

まず、古くは「お母さん」を「アンマ」、「お婆さん」を「アネイー」と言っていた（上嘉鉄 (2) の状態）。ところが、戦後、鹿児島から「お母さん」を表す「オッカ」が入ってきて、「アンマ」の位置を襲った。古い「アンマ」と新しい「オッカ」は、「お母さん」の位置で併存する（これはちょうど、共通語で「オカーサン」と「ママ」が併存するのと同じ状態である）。それが中里 (1) である。次に、新しい「オッカ」が「お母さん」の意味で優勢になってくると、古い「アンマ」はだんだん「お婆さん」の方へ意味をスライドしてくる。それが荒木 (1)、荒木 (2)、中里 (2) である。最後に、「アンマ」が「お婆さん」の位置に坐り、古い「アネイー」が消滅して、「お母さん／お婆さん＝オッカ／アンマ」という体系ができあがる。それが小野津、志戸桶、上嘉鉄 (1) である。

5. 二人の「アンマー」

鹿児島から「オッカ」が入ってきたときに、「アンマ」はなぜ「お婆さん」へ意味をスライドさせたのか。「アンマ」が消滅して「オッカ／アニー」となってもよかったのに、なぜ「オッカ／アンマ」になったのか。それには、奄美・沖縄における「母」を表す語と「婆」を表す語の関係を見る必要がある。

中本（1983）の「親族語彙『父母』『祖父母』について—比較方言学的考察」には、琉球諸語の「祖母」を表す語に次のような特徴があると述べられている。

「祖母」をあらわす語は「母」をあらわす語を基本にして構成される。

アンマ系のように本来「母」をあらわす語が推移して用いられるものもあり、パーパー系のように「母」をあらわす語に接頭語「大」を付けることによって「祖母」をあらわすものもあり、ハーメー系のように、「母」をあらわす語に、接尾敬称辞「前」を付けて「祖母」をあらわすものもある。（中本 1983: 151）

「『祖母』をあらわす語は『母』をあらわす語を基本にして構成される」というのは、琉球諸語に限ったことではない。古代日本語の「ババ（婆）」も「ハハ（母）」を基本にして作られている。周知のように、古代日本語のハ行子音の発音は *p と推定されている（* は推定形を表す）。つまり、「ハハ（母）」は *papa, 「ババ（婆）」は *baba という発音だった。日本語では、清音（無声音）と濁音（有声音）を比べると、濁音には「大きい」というイメージがある。このことは、オノマトペの「パラパラ」が小粒の雨を表し、「バラバラ」が大粒の雨を表すことを考えると分かりやすいだろう。papa と baba も同じで、baba には大きいというイメージがある。そのため、「*papa（母）」を基本として「母よりも大きい母」という意味で「*baba（婆）」ができたものと思われる。また、英語の grandmother（祖母）やフランス語の grand-mère（祖母）も、「大きい（grand）+母（mother, mère）」という語構成を持っている。

ただし、喜界島方言では「大きい」にあたる語を伴わず、「お母さん」を表すことばが直接「お婆さん」を表すことばになっている。ちなみに、喜界島方言の「大きい〜」は「ウフ〜」で、「ウフツチュ」（大人）、「ウフ・ハマチ」（大髻一女の髪束の大きなもの）、「ウフ・アヂー」（曾祖父）、「ウフ・アネイー」（曾祖母）などの語が『喜界島方言集』に掲載されているが、「*ウフ・アンマ」（大きいお母さん）は掲載されていない。中本（1983）によると、「アンマ」が「大きい」にあたる語を伴わずに「お婆さん」を表す地域は、「宮古、八重山を中心に分布し、奄美大島にも点在する」（中本 1983: 150）という。また、須山（1979）には、奄美大島大和浜の下層階級で、「お婆さん」を表すことばが「フンマ（大+アンマ）」から「アンマ」へ変化した例が挙げられている。琉球語圏の北と南に「祖母」を表す「アンマ」が分布することは興味深い。最初の疑問、鹿児島から「オッカ」が入ってきたときに、「アンマ」はなぜ「お婆さん」へ意味をスライドさせたのか、はまだ疑問のままである。

この問題を解く鍵は、じつは「お父さん」に隠されている。「お父さん」を表す語にも似

たような現象が起きているからである。そこで次に、喜界島方言の「お父さん」を表す語を見ていくことにしよう。

6. 喜界島方言の「お父さん・お爺さん」を表す語

「お父さん・お爺さん」を表す語は、『喜界島方言集』に次のように書かれている。

- アヂャー 父。又家庭に依っては若い祖父をかく呼ぶことがある。
 ヤッキー 兄。若い夫婦間では妻が夫を呼ぶにも用い、又若い父を子どもが斯く呼ぶ事も多い。
 アヂー 祖父。または老爺。

大正、昭和初期の喜界島方言では、「兄／父／祖父＝ヤッキー／ヤッキー・アヂャー／アヂャー・アヂー」という状態だったことが分かる。2010年の調査の結果もこれとほぼ同じ状態である(表2。なお「ヤッキー」という語は、喜界島南部で「ヤッキー」[jakki:]、北部で「ヤッケイー」[jakki:]と発音される)。2010年の調査では、これに「ニー、オニーサン、キンカー」(兄)、「オトー」(父)が新たに加わっている。このうち「ニー、オニーサン」「オトー」は「オッカ」(母)と同じで、戦後、鹿児島から取り入れられた語、「キンカー」は「次兄」を表す「ヤッキンカー」が変化したものである。「ヤッキンカー」は『喜界島方言集』に次のように出ている。

ヤッキン・カー 次兄。カーは指小辞。イナッキーともいう。

「ヤッキンカー」は本来、「次兄」を表す語だったが、「ヤッキー」が「父」へスライドした後の穴を埋めるために、「次兄」から「兄」へ昇格したものと思われる。なお、「イナッキー」は「イナ・ヤッキー」(小さい兄)の意である。

表2 喜界島方言の「兄」「父」「祖父」を表す語

地域	単語	兄	父	祖父
小野津		ニー、 <u>ヤッケイー</u> (古, 先輩・尊敬)	<u>アヂャー</u> , インガウヤ (男親, 名称)	アヂー
志戸桶		キンカー	<u>ヤッキー</u> , オトー (新), <u>アヂャー</u> (古)	
上嘉鉄		<u>ヤッキー</u>	<u>アヂャー</u>	アヂー, ジーサン
中里		キンカー	<u>ヤッキー</u>	アヂー, <u>アヂャー</u>
荒木		オニーサン, <u>ヤッキー</u> (親戚の目上の男の人 (古))	オトー	アヂー, <u>アヂャー</u>

(「ヤッキー・ヤッケイー」に下線を、「アヂャー」に波線を引いた。)

7. 喜界島方言の「お父さん・お爺さん」を表す語の歴史

喜界島方言の「お父さん」を表す語で注目されるのは、本来、「お兄さん」を表す「ヤッキー」が「夫」の呼称として使われるようになり、さらに「お父さん」にも使われるようになっていった点である。同じことは、奄美大島大和浜にもあったようで、須山（1979）には、次のように書かれている。

なおヤクムキ・ヤンムキ（木部注：「兄」を表す語）の用法で見落としてならないのは、妻が夫のことを親類に向かって話題にするときに、この《同世代年長男子》の呼称を用いることである。家庭内では妻は夫をジュー（木部注：上層階級で「父」を表す語）と呼ぶ。子らも使用人たちもジューと呼ぶのであるからそれは極めて自然である。（中略）親類に対してジューで話をしては自分の身内である夫を敬しすぎて、相手に対して礼を欠く。呼び捨てにするには家長の位置は——妻と夫とは旧家族制度の中では決して対等でない——大き過ぎる。その事情を微妙に汲み取って、ヤクムキ呼称が使われたと言えよう。（須山 1979: 15）

遠縁のT家のジューを、年下のF家のジューは○ヤクムキと呼んだが——そしてその呼び方は当然の理に基くが——F家の娘であるOまでが、その人を父親と同じく○ヤクムキと呼ぶべくしつけられていた。（須山 1979: 16）

‘janmi’（ヤンムキ）が本来はアジャを家長とする家（木部注：下層階級）にあって子 ego と同世代・年長の男子を呼ぶ語であったことはまちがいない。すなわち一家族の中では《兄・兄ちゃん》である。ところがいつからか、このヤンムキを《家長・父・父ちゃん》とする（中略）家庭が出来て、明治期に到っている。（須山 1979: 13）

須山（1979）では、妻が夫のことを「ヤクムキ」というのは、妻は自分の夫を敬して扱うべきものという士族の風による（須山 1979: 26）と捉えている。しかし、喜界島の「ヤッキー」は士族に限ったことではないので、別の原理が働いていると考えなければならない。それはおそらく、次のようなものでなかったかと思う。

「ヤッキー」は本来、家族内の「兄」を表すことばだった。それが家族以外の青年男子に対しても使われるようになった。鈴木（1973）のいう親族名称の第一の虚構的用法である。本土方言でも家族以外の青年男子を「○○にいさん」と呼ぶことがある。このような中、集落内の男女が結婚すると、若い妻が夫のことを結婚以前と同じように「ヤッキー」と呼ぶ場合が出てくる。喜界島では最近まで、集落内の男女が結婚することがほとんどだったから、このようなことは、ごく普通のことだったのではないかと思われる。こうして「夫」を表す「ヤッキー」が生まれる。次に、若い夫婦に子どもが生まれると、子どもは母親が父親を「ヤッキー」と呼ぶのを聞き、自分も父親を「ヤッキー」と呼ぶようになる。こうして、「父」を表す「ヤッキー」が生まれた。一方、本来「父」を表していた「アチャー」は、「アンマ」

が「お母さん」から「お婆さん」へ意味をスライドさせたのと同じように、「お爺さん」へ意味をスライドさせていった（図2）。

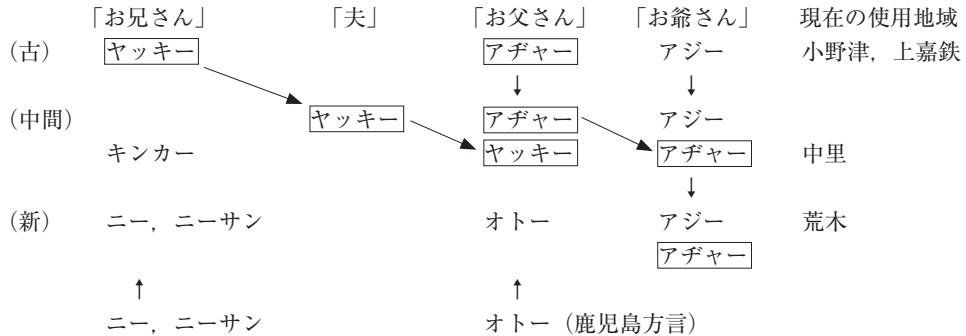


図2 喜界島方言の「お兄さん・お父さん・お爺さん」を表す語の変化

8. 喜界島方言と東京方言の親族名称のシステムの違い

結婚や出産により相手の位置づけが変化したにもかかわらず、若い妻は相手（若い夫）を相変わらず結婚前の名称の「ヤッキー」で呼び続ける、そのことが「ヤッキー」の意味変化の原因であろうと思う。おそらく「アンマ」にも同じことが起きたに違いない。いま、一家の若い夫婦に子どもが生まれたとする。すると、それまで「アンマ」と呼ばれてきた人（若い夫婦の母）は「お婆さん」という新たな位置づけを与えられる。ところが、若い妻はその人のことを依然として元の名称の「アンマ」で呼び続け、その結果、「アンマ」が「お婆さん」を表すようになる。一方、「若いお母さん」は「オッカ」——本土から取り入れた名称——で呼ばれるようになる。

このようなシステムは、東京方言の親族名称のシステムとは大きく異なっている。よく知られているように、東京方言には「家族の最年少者を基準にとり、呼びかけられる人あるいは言及される人物が、すべてこの最年少者から見てなんであるかを表す用語で示される」（鈴木 1973: 172）という法則がある。第二の虚構的用法と呼ばれるもので、たとえば、若い夫婦は、子どもが生まれる前は「アナタ・オマエ」と呼びあうが、子どもが生まれた後は「オトーサン・オカーサン」と呼びあうようになる。また、若い夫婦の父母は、子どもが生まれる前は若い夫婦から「オトーサン・オカーサン」と呼ばれ、お互いも「オトーサン・オカーサン」と呼びあうが、子どもが生まれると若い夫婦から「オジーサン・オバーサン」と呼ば

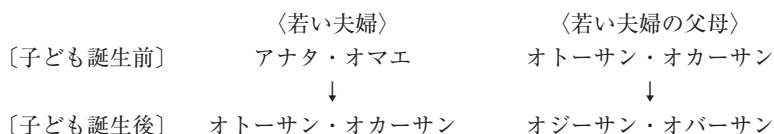


図3 東京方言の親族名称

れ、お互いも「オジーサン・オーバーサン」と呼びあうようになる。

家庭内での位置づけが変わっても、元の名称で呼ばれ続ける喜界島方言と、常に家族の最年少者から見てなんであるかを表す用語で呼ばれるように呼称が変化していく東京方言、両者の間には基本的なシステムの違いがある。その違いがなにに基づくのかは、次の課題である。

●付記●

調査の際には、喜界町教育委員会、喜界町のみなさんに大変お世話になりました。この場を借りて感謝申し上げます。

●参考文献●

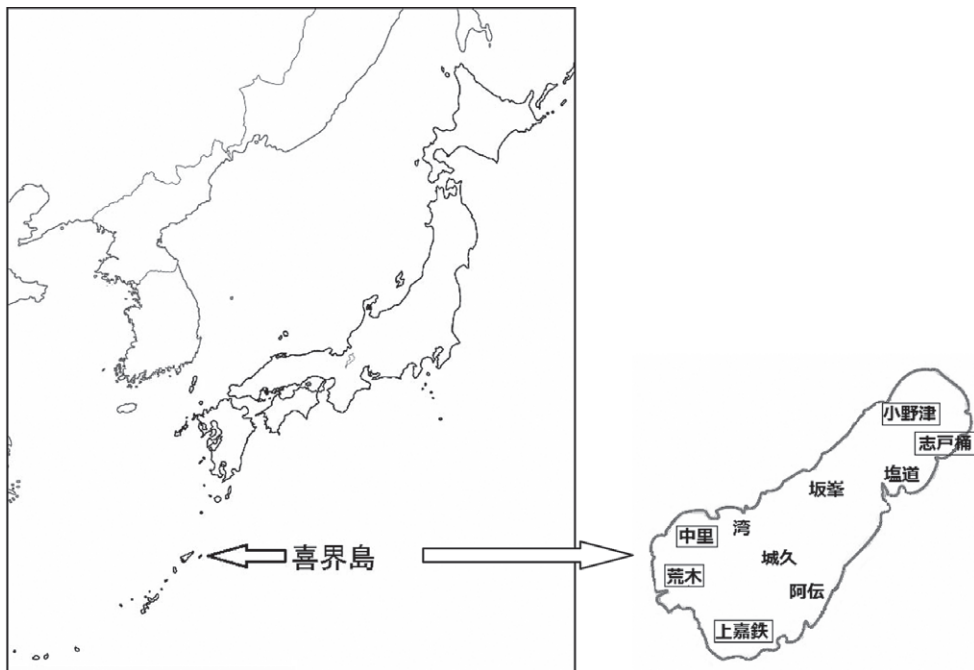
岩倉市郎（著）・柳田国男（編）(1941)『喜界島方言集』東京：中央公論社（東京：国書刊行会 1977の復刻による）。

木部暢子(2013)『じゃって方言なおもしとか』東京：岩波書店。

鈴木孝夫(1973)『ことばと文化』（岩波新書）東京：岩波書店。

須山名保子(1979)「親族称呼の体系の崩れるとき—奄美大島大和浜方言研究ノートⅡ—」『学習院大學國語國文學會誌』22: 8-27.

中本正智(1983)『琉球語彙史の研究』東京：三一書房。



喜界島の位置

喜界島調査地点

《要旨》奄美喜界島方言の親族語彙のうち「お父さん・お母さん・お爺さん・お婆さん」を表す語を取り上げ、喜界島方言の親族名称（reference term）と親族呼称（address term）のシステムが東京方言のそれと大きく異なっていることについて述べる。たとえば、喜界島方言では、「アンマ」が地域により「お母さん」を表したり「お婆さん」を表したりする。その理由は、喜界島方言では、若い夫婦に子どもが生まれても、若い夫婦の「お母さん」（子どもにとっての「お婆さん」）が依然として元の名称「アンマ」で呼ばれる傾向があるからである。その場合、「若いお母さん」は「オッカ」——本土から取り入れた名称——で呼ばれる。一方、東京方言の親族名称と親族呼称は、一番下の子を基準として決められる。たとえば、若い夫婦に子どもが生まれると、若い夫婦の「お母さん」は「お婆さん」という位置づけを新たに与えられる。そうすると、名称・呼称も「オカーサン」から「オバーサン」へ取り替えられる。このように、両方言の親族語彙は、システムを大きく異にしている。

Abstract: This article discusses kinship terms in the Kikaijima dialect of the Amami region and in the Tokyo dialect. Focusing on words which mean ‘father’, ‘mother’, ‘grandfather’, and ‘grandmother’, I claim that the system for using kinships terms as reference terms and address terms is markedly different in the two dialects. For instance, in the Kikaijima dialect, the word ‘*anma*’ means ‘mother’ in some areas and ‘grandmother’ in other areas. The reason is that, in this dialect, when a young couple have a child, the ‘mothers’ of the young couple tend to continue being called ‘*anma*.’ In this case, ‘the young mother’ is called ‘*okka*.’ — a word adopted from the mainland. On the other hand, in the Tokyo dialect, reference terms and address terms are determined based on the youngest child in a family. For example, when a young couple have a child, the ‘mothers’ of the young couple are considered ‘grandmothers,’ and both the reference term and the address term shift from ‘*oka:san*’ to ‘*oba:san*.’ In this manner, these two dialects differ significantly in their kinship term systems.

木部 暢子 (きべ・のぶこ)

国立国語研究所副所長、時空間変異研究系長。博士（文学）（九州大学）。鹿児島大学名誉教授。2010年4月より現職。主な著書・論文：『鹿児島県のことば』（共著、明治書院、1997）、『西南部九州二型アクセントの研究』（勉誠出版、2000）、『日本語アクセント入門』（共著、三省堂、2012）、『方言学入門』（共著、三省堂、2013）、『じゃって方言なおもしとか』（岩波書店、2013）。

受賞：新村出財団研究助成（新村出財団、1990）。

社会活動：日本語学会理事、日本音声学会理事、日本学術会議連携会員。

基幹型共同研究プロジェクト「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」
プロジェクトリーダー 木部暢子（国立国語研究所 時空間変異研究系 教授）

プロジェクトの概要

グローバル化が進む中、世界中の少数言語が消滅の危機に瀕している。2009年のユネスコの発表では、アイヌ語のほか、沖縄県のほぼ全域の方言、鹿児島県の奄美方言、東京都の八丈方言が危険な状態にあると指摘されている。本プロジェクトでは、これら危機方言の調査を行ない、その特徴を明らかにすると同時に、言語の多様性形成のプロセスや言語の一般特性の解明にあたる。また、方言を映像や音声で記録・保存し、それらを一般公開することにより、危機方言の記録・保存・普及を行なう。